

当報告の内容は、報告者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「モンゴル諸語の言語変容：内的要因と外的要因」

(2018年度第2回(通算第2回)研究会)

Synchrony and Diachrony of Mongolic Languages: Internal and External Factors (The 2nd meeting)

日時：2018年12月15日(土)

Date: 15th Dec. 2018

場所：AA 研研修室 (405)

Venue: Room 405 (Workshop space), ILCAA

Language: Japanese

第2回目の研究会となる今回は、3名の共同研究員に報告していただいた。報告は、1) モンゴル語文法研究においてより詳細な記述が求められるポイントについて、アルタイ諸言語および日本語・朝鮮語等を通して指摘した風間による報告、2) モンゴル語閉鎖音における対立を音響音声学の観点から実証した植田による報告、3) 契丹語・契丹文字研究の概況をまとめた大竹による報告の3本である。それぞれが研究の着眼点、分析手法、対象といずれも異なる報告であったが、いずれもが現在のモンゴル諸語研究における問題点を適切に指摘した、参加者を刺激する内容であった。とくに大竹による契丹語に関する報告は、契丹語研究のここ数年の急速な進展をうかがい知ることができる内容であり、モンゴル諸語比較研究の今後にも期待がもてる好報告であった。なお、研究会開催に先立ち、山越がモンゴル国政府から刊行された新正書法辞典の紹介と、モンゴル国科学アカデミーおよびモンゴル国立大学図書館に関する情報提供をおこなった。新正書法辞典に関しては参加者間で若干の内容の検討をおこなった。(文責：山越康裕、敬称略)

1. 風間伸次郎 (AA 研共同研究員, 東京外国語大学)

「モンゴル語における文法の諸問題」

本発表は、Kullmann and Tserenpil (1996) の pp.73-210 の範囲の記述および例文を検討し、文法的な問題点をとりあげたものである。検討の際にはモンゴル語母語話者のコンサルタントの内省による諸情報を賜り、それをヒントに分析を行った。とりあげた問題は、近隣の「アルタイ型」言語、すなわち日本語、朝鮮語、ツングース諸語、チュルク諸語との対照的観点から関心を引く現象であり、具体的には I. 実詞類(名詞、形容詞など)とその文法的カテゴリーと、II. 動詞の文法的カテゴリーに関するものである。I. に関しては、数、指小性、格に準ずるもの、複他動詞文における格枠組み、再帰人称接辞や人称小詞の用法、などを、II. に関しては、受動態や協同態、統合的完了アスペクトの意味、bol-「なる」による時制の調節、日本語の「やりもらい」のような使い分け、などをとりあげた。

2. 植田尚樹 (AA 研共同研究員, 大阪大学)

「モンゴル語における有気性の対立と音響的特徴」

モンゴル語には阻害音に喉頭素性による対立があるが、その対立に関与する音響的特徴は明らかでない。そこで本発表では、ハルハ方言の閉鎖音における VOT, 基本周波数 (F0), およびインテンシティーの特徴を報告した。

VOT は、<б, д, г> 系列では short lag, <п, т, к> 系列では long lag であることが明らかになった。後続母音開始時の F0 は前者で低く、後者で高い傾向が見られ、これは通言語的な特徴に合致する。インテンシティーは、閉鎖開放時のインテンシティーについては両者で差がないのに対し、後続母音開始時のインテンシティーは前者で高く、後者で低いことが明らかになった。これは生理学的に自然な現象であると同時に、VOT との相関も見られ、VOT の違いによる受動的な特徴である可能性が高い。最後に、VOT およびインテンシティーにはハルハ方言と内蒙古方言で差が見られることに触れ、言語差・方言差に注目した研究が必要であることを述べた。

3. 大竹昌巳 (AA 研)

「契丹語を俯瞰する」

本発表では、10-12 世紀の契丹文字文献から知られる契丹語について、音韻論と名詞形態論を中心に現在の解釈状況を俯瞰した。

はじめに契丹語の系統・資料・文字について概観したあと、契丹語の母音・子音に関して、その体系、中期モンゴル語との対応、推定される音変化についてまとめた。また、音調に関して、契丹語の漢字音写と漢語の契丹小字転写の両資料の分析から、契丹語が現代のハルハモンゴル語等と類似するピッチパターンを有していたことを示した。

契丹語の品詞は大きく名詞類・動詞類・不変化詞類に分類できるが、このうち名詞類は格接尾辞の附加可能なものであり、形態論的特徴からさらに名詞・代名詞・形容詞・基数詞・空間詞に分類することができる。発表ではこれらを一通り観て、特に人称代名詞と基数詞の派生表現 (序数詞・度数詞・集合数詞・概数詞・分配表現) については例文を挙げて取り上げた。

4. 総合討論および今後の方針についての検討

来年度以降の開催について確認した。さらに第 1 回研究会同様、第 2 回研究会資料もウェブサイト (<https://sites.google.com/view/ilcaa-mongolic/>) に置くこととした。